早稲田大学 本庄高等学院
2023年度 一般·帰国生入試

国語（問題）

2023年度

〈R05170062〉

注意事項

1. 問題冊子および解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
2. 問題は2～9ページに記載されている。問題冊子や解答用紙の印刷が不鮮明であったり、ページが抜けていたり、汚れていたりしている場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄にＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルで記入すること。
4. 受験番号および氏名は、試験が始まってから、解答用紙の所定欄（2か所）に正確にていねいに記入すること。
   読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

数字見本
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9

5. 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示がでたら、ただちに筆記具を置くこと。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

阿部昭と初めて会ったのは、一九七〇年、「内向の世代」の作家を中心に集まる例会においてであった。一九七〇年当時は、「全共闘」の華①やかなころで、高橋和巳などがベストセラーになっていた。[A]、そのころの文学雑誌で「内向の世代」が中心的であったことは、今から見れば奇妙に見える。中上健次をのぞけば、私より若い世代はまったく彼らを読まなかったのではないだろうか。読んだとしても、そこに政治的なラディカリズムとは異質[1]なラディカリズムを見いだすというようなことはなかっただろう。

「内向の世代」は、小田切秀雄が命名したものだが、それ以後彼がどう命名しようとそんなふうに「――世代」として定着したことがなかったところからみれば、これはたぶん最後の「文学世代」だったのだろう。日本の近代文学史は、新人が出て来るとき、前世代を否定すべき新しい主張を共同的に掲げて登場することを示している。あとでバラバラになるとしても。この現象が終ったということは、いわば「近代文学」が終ったということである。

[B]「内向の世代」に新しいスローガンなどなかったし、積極的に結集したのでもない。ただ、それはある否定性[2]においてのみ、共通していた。その点では、「戦後文学派」に対して「第三の新人」と呼ばれた人たちの登場の仕方と似ている。「内向の世代」の作家の前にいたのは、大江健三郎[3]だといっても過言ではない。大江健三郎が戦後文学派の課題を吸収してしまっていたとしたら、同世代の作家が位相的に安岡章太郎や遠藤周作といった「第三の新人」に似てくるのは当然であろう。彼らはほぼ大江と同世代であった。[C]、同世代に大江がいたために、その文学的出発を遅らされ、一旦作家たることを諦めた人たちであった。彼らはそれぞれ非文学的な勤め人の生活を経験していた。

彼らは、主題性やアクチュアリティを拒否するところから始めた。その意味で、政治的現実から背を向けて「内向」する作家たちとして否定的に位置づけられたのである。私はそういう評価に反対だった。古井由吉や後藤明生は、「第三の新人」とはちがって、内向しうるような自己や内面をまったく信じていなかった。自己そのものが「関係」でしかないという視点を、これほど明確に方法的にもっていた作家たちはかつていなかった。中上健次もまたここから出発したのである。これに比べれば、「全共闘」の物書きの方がはるかに内面的だったし、今なおそうである。

阿部昭は、この意味では、「内向の世代」として際立つような特徴を持っていなかった。[D]、インテリの内面性を否定するという意味で、彼が最も「内向の世代」というべきものだったかもしれない。たとえば、古井由吉や後藤明生の方法的姿勢や志向は大江健三郎と共通するものだが、阿部にはそれがなかった。彼は最もそれを斥(しり)ぞけていた。「内向の世代」は大江の影のもとで出発したと私はいったけれども、たぶん阿部昭がそれを最も強く意識していただろう。

事実、彼は大江健三郎と同じ東大仏文科出身で、学生作家としてすでにスターであった大江を横目で見ながら文学を始めるほかなかったからである。彼は意図的に大江の対極に立とうとしたのかもしれない。むろん阿部は同世代のなかでも特に、戦後文学の流れに対抗する理由を持っていた。彼は旧軍人の一家に育ち、大江が代表する戦後的な価値に対する異和に固執したからである。彼は

「第三の新人」のように非政治的であったというよりも、むしろ「［　I　］」な作家であった。

一九七〇年以来、私は新米の批評家として「内向の世代」の会合のなかに混じっていた。ほとんどの人と初対面であったが、ともかく話はしたなかで、阿部昭とは一度も話さなかった。阿部はいつも不機嫌で、批評家ごときがなぜこんなところにいるのだという態度を隠さなかった。それは特に私に向けられたものではなかった。[4]彼は、「内向の世代」という名のグループとして集まっていること自体が気に入らなかったのだ。私もこの例会は居心地が悪かった。何でこんなところにいるのかという思いを禁じえなかった。先にいったように、私は「内向の世代」に、政治的なラディカリズムとは違った一種のラディカリズムを見ていたが、結局それは物足りなかったのである。

のちに、阿部は古井や後藤が雑誌「文体」を始めたときにも参加しなかった。彼の考えでは、「文体」などではなく、たんに「文章」というべきだったのだ。私は、まったく別の理由からそう考えていた。阿部は、「文体」という言葉に、方法意識へのこだわりを見、私は逆にそれの②欠如を見たのだった。私が阿部と親しくなったのは、彼がますます③狷介さを発揮して文壇に背を向けるようになってからである。私も一九七七年に二年ぶりにアメリカから帰って、それまでの人とのつきあいが④億劫になっていたころだった。阿部は人づきあいを絶ち、めったに「上京」もしなくなった。かつてはテレビのディレクターもしていた男が世の中からみるみる遅れているといった感じがあった。奇妙なことに、私はそういう阿部昭とのほうが話しやすかった。意見の一致など求めずにすむ関係にあったからである。

阿部はある意味で、昭和の新文学・新思想について行くことを拒絶した大正の私小説作家のようなものだった。しかし、大正の作家が「文芸復興期」に復活したように、阿部はあるかたちで復活した。それは、「短編小説⑤礼讃」という彼のエッセイが意外に広く読まれたことにあらわれている。それは、もう西洋の文学に追いつこうとかそれを規範にするということはいらない、日本人の感性に合ったものでいいのではないかという阿部の主張が、今日の自足的な時代の風潮に合致したからである。「短編」が復活するのは、大正期であれ、昭和十年代であれ、外部的なもの、他者的なものへの緊張が失われたときである。

しかし、阿部昭自身はべつに時代潮流に敏感だったわけではないし、[5]それに迎合したのでないことも明らかだ。彼はたんに「［　I　］」であり、それを貫いたのである。他の者が彼のようにやれるわけはない。私は阿部の初期の短編がどれも好きだが、とりわけ、『千年』にある次のような一節をいつも思い出す。《これは大したことではなかっただろうか？　子供が、自分たちの感情生活が大人たちに一顧もされない幼年期の早い時期に、もうこの人生の漠たる哀愁だけは知ってしまうというのは。もしそうだとしたら、あとわれわれが学ぶべきどんな重大な事柄が残されているというのか？》

この問いに私は答えられない。違うといいたい。しかし、阿部昭が死んで、私は「この人生の漠たる哀愁」にうちのめされている。それは老年の徴候にすぎないのだろうか。

（柄谷行人「漠たる哀愁」による）

注　ラディカリズム…現在の制度を根本から変革しようとする考え・行動方針。
アクチュアリティ…今日性。

問1　空欄［A］～［D］に入るべき語を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　しかし　イ　そして　ウ　もっとも　エ　だから

問2　傍線部1「異質なラディカリズム」とは何か。本文中の語句を用いて五十字以内で答えなさい。

問3　傍線部2「ある否定性」とは何を指すのか。それを端的に述べている二十字以内の箇所を本文中から探し、その始めと終わりの三字を抜き出して答えなさい。

問4　次の文章は傍線部3「大江健三郎」について述べたものである。これを読み、あとの(1)・(2)の問いに答えなさい。

大江健三郎は、東京大学在学中から作品を発表し始め、一九五八年には「飼育」で［a］賞を受賞、一躍新世代の旗手と目されるようになった。その後も現代文学の一翼を担う重要な作家として、時代の第一線に立って活躍を見せた。海外においても評価が高く、一九九四年には［b］賞を受賞、［c］以来二十六年ぶり、日本の作家としては二人目の受賞者となった。

(1)　空欄［a］に入るべき漢字二字の語句、空欄［b］に入るべき六字の語句をそれぞれ答えなさい。

(2)　空欄［c］に入るべき文学者の名前を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　三島由紀夫　イ　谷崎潤一郎　ウ　川端康成　エ　菊池寛

問5　空欄［I］（二箇所）に入るべき語句を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　歴史的　イ　反動的　ウ　主観的　エ　後進的

問6　傍線部4「彼は、「内向の世代」という名のグループとして集まっていること自体が気に入らなかった」とあるが、「気に入らなかった」理由として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　前世代を否定しようとして結集したわけではないのに、一括りに扱われているから。

イ　自分が斥ぞけている方法的姿勢や志向を持っている作家たちと同席させられているから。

ウ　戦後文学の課題を吸収した大江健三郎に追随している作家と同類に扱われているから。

エ　文壇に背を向け、人づきあいを絶っているのに、わざわざ上京させられているから。

問7　傍線部5「それ」の内容を述べている十五字以内の箇所を本文中から抜き出して答えなさい。

問8　傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

(二) 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

[1]狭くて暗いところが好きだ。

押し入れに入って隠れているときの高揚の中で僕はこの偏愛に目覚め、自分の居場所をそのキュウクツな暗がりに作り始める。①

布団の畳み方を変えてソファにしたりベッドにしたりしてギュウギュウの中でものを食べたり飲んだりしていると必ず汚してしまうしそれが必ず親に見つかるので、布団を諦める。

けれども布団の入ってない押し入れなんて凄くわざとらしい空間なのだ。それはもう僕の入る場所になってしまい、押し入れではなくなる。そうするためのところではない場所に潜り込んでる感覚がなくなってしまう。

ドラえもんやラブやんみたいなことをしたいわけじゃないのだ……。

とは言え頭でっかちなことを主張したいわけでもないのでとりあえず僕の中の違和感のほうを我慢しながら押し入れを僕の小部屋として仕上げる。小さな机とライトを入れ、座椅子と座布団を持ち込む。本棚も作る。

まあこうしてきちんと部屋機能を小さな空間に押し込んでみるとなかなか悪くない。居心地もいい。ともかくきゅっとしていて余計な広がりのないのは正しい。

学校に行ったり家のリヴィングにいたりすると僕は僕自身が次第にほどけてバラバラになってしまうんじゃないかって気がしてくる。

広すぎるのだ。

起きて半畳寝て一畳。起きて半畳寝て一畳。起きて半畳寝て一畳……。

で、小学生のうちのしばらくは父親が寝室にしている和室の押し入れの半分を自分の部屋として過ごす。

父親がもの凄く嫌がる。押し入れの中で小さくなって息をひそめてるのが不気味だと言って。別に意識して静かにしてるわけじゃないのだけれど。

僕がいないときも押し入れの中に誰かいるような気がするのも気持ちが悪いのだと言う。それについては何もしてあげられることはないな……と思っていたら父親が僕が元々使っていたほうの部屋で寝るようになる。

それで父親に申し訳ないなと思ってたってことでもないのだけれど、僕は新しい、もっと本来の僕の望み通りの場所を見つける。

クローゼット。

床に物を置いて積んでく押入れタイプのものじゃない、バーに洋服などを引っかけたり吊るしたりする物入れ。

姉の部屋には作り付けの大きなクローゼットがあって、僕はふと、そこの床なら部屋っぽく作らずとも僕がじっとしてるだけの空間ができるんじゃないかなと思う。和風の押し入れはそこにいようと思うと何かをどけなければならないけれど、クローゼットは必ずしもそうじゃないからだ。何と言うか、[2]押し入れの中の僕が感じていたわざとらしさがかなり軽減されるんじゃないだろうか？

姉の部屋にこっそり忍び込んで確認する。

が、何て持ち物の多いやつなんだ……と絶望しそうになる。姉はステンレス製のバーに端から端までぎっちり服をかけていて、さらにその下にはキャビネットと衣装ケースをところ狭しと積んである。それでも僅かな隙間があるとそこにはバッグ類が突っ込んであって、まるで

I

のような見事さだった。

でもだからこそ、そこに自分を詰め込んでみたいという気持ちがさらに涌いた。

試しに物をどけてみる。押し入れよりも奥行きが狭くて自然と横を向くことになる。②カタハバが奥行きにハマっている。僕が体育座りするとハンガーで吊るしてある衣類のすそにぎりぎり頭が当たらないぐらいだ。そして何より、潜り込んでる感覚がこれぞ、という具合にある。

「素晴らしい……！」

と思わず声が出るくらいだ。

姉に見つかる。

どつかれる。

人の物を勝手に触るなと言われる。無断で人の部屋に入るなとも。

正しい。

でも頼んでOKの出る話ではないのでしょうがないじゃないか。

まあそれを言ってさらに相手をカッカさせても仕方ない。何しろ僕にはそれより大事な交渉ごとがある。

「あのさ、断捨離とかしたら？」

「あんた今度はこのクローゼット③ネラってんの？」

ズバリときた。

姉は思ったよりも頭の回転が速いのかもしれない。

「いやまんまだから。クローゼット入ってて何言ってんの。とりあえず出なよ」

出ない。

力ずくで出される。④ケられる。

で、泣く泣く押し入れ部屋に戻るけれども、すると姉が訪ねてきてぐるりと内部を確認する。

「あんた、クローゼットに行ったらここのこの部屋どうすんの？」

「……あ、こことクローゼット交換してくれる？」

「駄目。あんたの部屋も頂戴」

「別にいいよ？お父さん寝てるけど」

「あんたがこっから出ればお父さんもこっち戻るでしょ」

「ああそうか」

姉が父親と交渉して姉の思う通りになる。

すなわち父親は元の和室に寝室を戻し、姉は押し入れと元の僕の部屋をクローゼットの一部、縦七十センチ×横七十センチ×奥行き四十五センチと交換する。

僕は姉に月千円で押し入れ内の小部屋を借りてそこで勉強して寝る。そしてそれ以外の時間を姉のクローゼットの中で過ごす。

キュッと音をたてて隙間に収まるようにして暗いクローゼットの中で他の物たちと過ごしていると僕は本当に落ち着く。心から。頭の芯が溶けてくるような感覚があって、それもいい。身体も姉

の服のラインナップと一体になったようで、自分というものが自分という形を保ったまま、あるいは隙間というものに形を整えられて、その曖昧な空間に存在しているような気持ち。
快適だ。
姉はゲラゲラ笑いながら僕の幸せをからかうけれども構わない。
「あんたって可愛いしモテるっぽいのに、本当に残念だねえ」
どうでもいい……。
「私の服とかあんまり触んないでね？」
興味がないし、そこに置いてある何かに触れて動かしちゃったりしたら僕の潜り込みの意味がなくなるのだ。あくまでもそっと、元々あった隙間に入り込みたいのだ。隙間を作るのではなくて。
「私の部屋とかもあんま見ないでね？」
全く見たくもない……。
「着替えとかも覗かないでね」
喋りたくない……。
僕はクローゼットの中で僕という形の無、言い換えれば隙間そのものになりたいのだ。
でも姉にそんなこと言っても理解できないだろうからと思って黙って座り続けていたら、たまに姉が姉の部屋に入ってくる僕を見て驚いたりする。
「あれ？あんたさっきこのクローゼットん中入んなかったっけ？」
入ってない。
「あれー？さっきあんた見た気がするけどな」
別のときにも
「ちょっと……、あんたいたの？じゃあ中にいるの、あんたの友達とかじゃないよね？」
などと言う。
どうやら僕の偽者がこのクローゼット⑤にシュッボッしているらしいが、何かの勘違いだろう。
……と言っているのに勝手にビビって姉がクローゼットの使用を制限しようとしてくるので僕は抵抗する。元の僕の部屋を好き放題に使っているくせに僕を追い出そうとするなんて……！
すると姉は元の僕の部屋のほうを正式な寝室とし、自分の部屋のほうを予備とする。
つまりクローゼットから洋服などを運び出してしまって妙にがらんとする。
とりあえず僕の服をあるだけ吊るしてみるけれども全く足りない……。
暗いクローゼットの隅っこで膝を抱えながらこの余りに余った空間をどう埋めようかなと考えていると、反対側の隅っこに誰か僕と同じくらいの大きさの子供が座っているのが判る。
あーこいつか。
僕の影。
僕と全く同じ格好で座っているので、何となくどうしてそいつが生まれたのかが判る気がする。
僕は荷物の中で僕の形の隙間になろうとしていたのだが、そうやって作った僕の形の隙間が、僕をもう一つ作ったのだ。
つまりそいつは僕と同じ気持ちを持つ僕自身であって、僕という隙間は僕を量産している。
みるみるうちに膝を抱えた僕が積み重なって、クローゼットを埋めていく。
僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕

僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕
僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕
僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕
ピッタリだ。
僕は僕と僕と僕の隙間に収まって、暗闇の中で僕たちと一体になる。

（舞城王太郎「クローゼットの中」による）

問1 傍線部1「狭くて暗いところが好きだ」とあるが、「僕」が「狭くて暗」くない場所を好まない理由は何か。それを述べている「～から」に続くような四十字以内の箇所を本文中より探し、その始めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問2 傍線部2「押し入れの中の僕が感じていたわざとらしさ」とあるが、「僕」が「わざとらしさ」を感じる理由を述べている一文を本文中から探し、その始めの五字を抜き出して答えなさい。

問3 空欄 I に入るべき語句を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 城の石垣　イ 漆黒の闇　ウ ビルの外壁　エ 巨大な尖塔

問4 傍線部3「この余りに余った空間をどう埋めようかな」とあるが、「僕」が「この余りに余った空間」を「埋め」たいと考える理由として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア クローゼットの中の荷物を動かして自分が入り込む隙間を作り出すことに、幸せを感じているから。

イ クローゼットの中に服や物が詰めこまれていると、僕という形の隙間を作ることができないから。

ウ クローゼットの中に潜り込んで姉の荷物と一体化し、自分を失うことに快適さを感じているから。

エ クローゼットの中で他の物たちの隙間に収まることで、僕という形の無になりたいと考えているから。

問5 傍線部4はどのようなことを表しているのか。本文中の語句を用いて七十字以内で説明しなさい。

問6　本文の内容の説明として最も適切なものを次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　姉は、自分の部屋・僕の使っていた部屋・和室の全てを自由に寝室にできるようになった。

イ　父の寝室ははじめ和室だったが、僕の使っていた部屋へ移動し、その後元の和室に戻った。

ウ　僕は自分が元々使っていた部屋を姉に渡し、その部屋の一部を有償で借りて寝室にした。

エ　姉は僕の部屋や和室にも持ち物を置けるようになったが、寝室はずっと自分の部屋だった。

問7　傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

〔以下余白〕

国語解答用紙

〈2023 R05170062〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（二）

問7 ①
②
③ って
④ られる
⑤

問6

問5 （70字）

問2 （始め） （5字）

問3

問4

問1 （始め） （5字）〜（終わり） （5字）

問8 ① やか
②
③
④
⑤

問7 （15字）

問5

問6

（一）

問4 （1） a （2字） b （6字）

（2）

問3 （始め） （3字）〜（終わり） （3字）

問2 （50字）

問1 A B C D

問6・7採点欄	問5採点欄	問2・3・4採点欄	問1採点欄	問8採点欄	問5・6・7採点欄	問3・4採点欄	問2採点欄	問1採点欄
＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―

〈2023 R05170062〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

（二）

問6・7採点欄	問5採点欄	問2・3・4採点欄	問1採点欄	問8採点欄	問5・6・7採点欄	問3・4採点欄	問2採点欄	問1採点欄
＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―	＋ ―

（一）